



*A Collection of
Researcher Role Models*

女性研究者ロールモデル集

—輝く先輩からのメッセージ—

Introduction 序文

岐阜大学長 森脇 久隆

岐阜大学は平成27年度文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(連携型)」の公募に、岐阜薬科大学、岐阜女子大学、アピ株式会社と共に「地域循環型女性研究者育成・支援プログラム」というテーマで応募し、採択されました。事業期間は6年間、到達目標は女性研究者の上位職採用を飛躍的に拡大することです。

上位職とは例えば大学の場合、教授、准教授等が相当します。前記の目標に到達する方策としては先ず内部からの昇進や外部からの登用が考えられるでしょう。しかし大学改革／大学活性化や企業のパワーアップという長期的な切り口から本事業を捉えると、まず助教など裾野に相当する女性研究者の割合を高める必要があることは言うまでもありません。

さて若年者にとって進学、就職、結婚が最初の三大関門という見方があり、女性には出産というライフイベントが加わるかも知れません。男女を問わずこれらを一つ一つクリアしながら前進するに際し、何らかの見本や手本(ロールモデル)があれば大いに参考にしたいものです。本冊子はまさに女性研究職を目指す方々向けに編まれたロールモデル集で、既に上位職に就かれた研究者、管理職から助教まで、多彩な経験が掲載されています。これから進路を考える学生の皆さん、既に就職し今後のキャリアパスを發展させたい社会人の皆さん、既に管理職にあり事業体の發展や部下の人材育成を図ろうという方々に、男女を問わず一読されるようお勧めします。

なお今回の冊子は平成23年3月に刊行された同様のロールモデル集以来、5年振りのものです。掲載された研究者に前版との重複は全くなく、また所属も岐阜大学オンリーから3大学・1企業に広がり、一層多彩な考え方、経験をご覧頂けます。学生、社会人を問わずキャリアパスを構築する上で大変参考にならうかと思えます。

最後に一つだけ申し上げておきたいことがあります。特に研究職として向上していくためには、常に自身の研究目標を見据え、同時に自身の現状と環境を評価の上、必要があれば目標や戦略をリバイスできる柔軟性を持つことです。本冊子からもその辺りの呼吸を読み取ることが出来るでしょう。お気に入りのロールモデルを一つでも見付ける手助けになれば幸甚です。

(平成28年2月16日 記)

Contents

目次

大胆に、自由に「今日」を研究し、 「明日」の必要を発見してほしい。	林 正子	6
日本の健康増進につながる 今の研究にやりがい。	山本 真由美	7
人の問題を科学的に解明し、 防災・減災につなげる。	小山 真紀	8
教育・研究・小動物診療・運営、 4足のわらじを履く今、思うこと。	柴田 早苗	9
いつも100%でなくとも、 “いつか恩返し”の心が大切。	高橋 由起子	10
アレルギーの子どもも 食べられる給食開発が目標。	柴田 奈緒美	11
自分の気持ちに素直に、忠実に。 悔いのない人生を送ってほしい。	寺町 ひとみ	12
未知の世界を切り拓く研究、 小さくても確かな足跡を残して。	永澤 秀子	13
美しい糸のように細々とでも 継続していくことの強さ。	水野 幸子	14
かけがえのない経験が、 人生の大切な糧になる。	山中 マーガレット	15
我が子の存在が原動力！ 周囲の理解と支援に感謝。	丹羽 桜子	16
自分らしく、コツコツと。 継続の先に差す光を求めて。	丸山 広恵	17

The background features a series of overlapping, semi-transparent geometric shapes in shades of yellow, green, and grey. A white, stepped line pattern runs diagonally across the top. Scattered throughout are various circular and oval shapes in light blue, pink, and white. In the bottom right, there are stylized white bird-like shapes within a circular frame.

輝く先輩からの
メッセージ

林 正子

はやし まさこ

岐阜大学副学長（多様性人材活力推進担当）・
男女共同参画推進室長

岐阜大学地域科学部地域文化学科 教授

【略歴】

1978年 岡山大学法文学部卒業

1980年 岡山大学大学院文学研究科修了

1980年 神戸大学大学院文化学研究科博士課程入学

1984-86年 ドイツ連邦共和国ミュンヘン大学留学

1987年 神戸大学大学院文化学研究科博士課程単位修得退学

1987年 岐阜大学教養部講師

1989年 岐阜大学教養部助教授

1994-95年 ドイツ連邦共和国ハイデルベルク大学日本学研究室客員教授

1996年 岐阜大学地域科学部教授

2003-04年 ドイツ連邦共和国ライプチヒ大学日本学研究室客員教授

2010年 岐阜大学副学長・男女共同参画推進室長

【研究分野】

日本近代文学



鷗外ドイツ留学
100周年
1984年 ベルリン



ミュンヘン大学の学生たちと 1985年

好きな言葉

一粒の砂にも世界を、一輪の野の花にも天国を見、君の掌のうちに無限を、一時のうちに永遠を握る。（松島正一・訳『対訳ブレイク詩集』／岩波文庫）

好きな一冊

宮本輝『錦織』（新潮文庫）。美しい織物のような文章と、人生の意義を穿つ巧みな思想によって創出された小説作品です。

大胆に、自由に「今日」を研究し、「明日」の必要を発見してほしい。

Masako Hayashi

日本近代文学の研究に専念

少女時代に『世界少年少女文学全集』を読みふけたことが、私が文学研究を志した原点です。師に恵まれ、「先生のようにになりたい」というロールモデルの存在が常に身近にあったため、将来は文学（国語）の教員を志望していました。

学部を終えた段階で、専攻する日本文学をもっと学びたいという願いから大学院に進学。修士課程・博士課程以降、日本近代文学研究に専念してきました。卒業論文・修士論文で対象とした作家が森鷗外でしたので、日本文学以外にドイツ文学や思想も学び、日本の近代文学自体を相対化するテーマに開眼しました。博士課程在籍時にはドイツ学術交流会の奨学生としてミュンヘン大学に2年間留学し、岐阜大学教養部に就職後も2度、ドイツの大学で講義をする機会に恵まれました。「国文」研究者の

卵が、些少なりともドイツ語の知識の修得に努めたゆえに巡ってきたチャンスだったと思っています。

文学から地域を学び知る力を

現在は、1.「近代日本の〈文明評論〉におけるドイツ思想・文化受容の意義」、2.「日本近代小説における〈自己探究〉の様相と作家の手法」、3.「日本近代女性作家による自己表現獲得の営為と成果」、4.「文学の創造契機としての風土論、地域学としての郷土文学研究」の主に4つのテーマで研究をしています。3.は明治10年代から第二次世界大戦後までの女性作家による文学活動とその表現形態を文学史的に位置づける試み、4.は自然環境としての風土が、文化を創造してゆく原動力になっていることを明らかにし、岐阜ゆかりの文学作品論を通じて地域学の意義を

探究するテーマです。

研究者を目指す後輩へのメッセージ

2015年8月に「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律（女性活躍推進法）」が成立したことを受けて、現在15%ほどの比率に止まっている女性研究者の活躍も大いに期待されています。今、研究者を目指す皆さんに、文学研究者として石川啄木の言葉をお贈りします。

「我々は今最も厳密に、大胆に、自由に『今日』を研究して、そこに我々自身にとっての『明日』の必要を発見しなければならぬ。必要は最も確実なる理想である（『時代閉塞の現状』）」。

思う存分、自分の得意分野を活かして「継続は力なり」を実践し、学問研究自体の魅力を満喫なさってください。

好きな言葉

「ノープレッス・オブリージュ」。研究者として恵まれた環境で学べることに感謝し、それにふさわしい義務を背負って社会貢献することが必要だと思います。

好きな一冊

渡辺淳一の『花埋み』です。日本初の女医である荻野吟子先生の生涯を題材とした作品で、感銘を受けました。



全国大学保健管理協会50周年
記念国際シンポジウムにて
(国際連携委員長として発表)



山本 眞由美

やまもと まゆみ

岐阜大学
保健管理センター 教授・センター長、岐阜大学
大学院創薬医療情報研究科 教授、医学部附
属病院糖尿病代謝内科 (兼任) 教授

【略歴】

1987年 岐阜大学医学部医学科卒業
1995年 医学博士 (岐阜大学)、南フロリダ大
学医学部内科学・生化学教室ポスドク留学
1998年 MBA for physician (南フロリダ大学)
2002年 岐阜大学医学部附属病院第三内科講師
2004年 岐阜大学保健管理センター教授
2007年 岐阜大学大学院連合創薬医療情報研
究科医療情報学専攻教授
2012年 岐阜大学保健管理センターセンター長

【研究分野】

内分泌・代謝学

日本の健康増進につながる 今の研究にやりがい。

Mayumi
Yamamoto

留学で医療マネジメントを学ぶ

「女性は手に職を」という明治時代生まれの祖父の言葉に目覚め、また、日本初の女性医師として活躍された荻野吟子先生の伝記に影響されて、医療の道を選択。医学部学生時代に祖父が脳梗塞で倒れたことから、慢性疾患をもっと学びたいと思い、内科医を志しました。

医学博士取得後すぐに、糖尿病合併症のメカニズムを研究するために南フロリダ大学へ留学。そこで医師のための経営学修士「MBA for physician」を学ぶ機会に恵まれました。クオリティマネジメントやリスクマネジメントなど、どんな業務や研究を行うにも組織のマネジメントは必要です。生活習慣病患者を支えるチーム医療の確立もマネジメントのひとつです。また、本学学生と職員の健康管理も高いマネジメント能力を要求されます。

学生の自己健康管理能力を養成

今は学生や一般市民を対象として、各種健康データの解析から新しい知見を出す研究を行っています。

例えば、岐阜大学卒業生の追跡調査で、20歳の頃に太っていた人は20～30年後の生活習慣病の頻度が有意に高いという結果が導かれました。これらのデータは実際の保健管理業務に役立っています。

また、高校生・大学生の意識調査で、8割が「30歳までに子どもを生みたい」と考える一方、「35歳を過ぎると妊孕力が下がる」ことを知らない学生が多いことを報告しました。この結果に基づき、妊娠を含めた人生設計などの情報を提供するDVD教材も作成し、全国で使用されています。

学生時代から自己健康管理能力を身につけることは、健康で活躍する生涯を

支え、これは生涯の医療費を削減することにもつながります。臨床医として患者さん、おひとりおひとりの病気を治すこともすばらしい仕事ですが、多くの人の健康改善につながる現在のこの仕事に、やりがいを感じています。

研究者を目指す 後輩へのメッセージ

留学は人生の投資です。日本の外から日本を見ることで改めて日本の良さが実感できます。日本では、きっと出会うことがなかっただろうという日本人との出会いもあり、人脈も広がります。ぜひチャレンジしてほしいと思います。また、女性研究者はまだまだ少ないのが現状ですが、その分恵まれたチャンスを与えられたと思って、頑張してほしいと思います。

小山 真紀

こやま まき

岐阜大学流域圏科学研究センター／地域減災研究センター 准教授

【略歴】

1996年 山口大学工学部知能情報システム工学科卒業

1998年 山口大学大学院理工学研究科 知能情報システム工学専攻修了

1999年 財団法人地震予知総合研究振興会東濃地震科学研究所研究員

2004年 東京工業大学大学院総合理工学研究科人間環境システム専攻博士(工学)

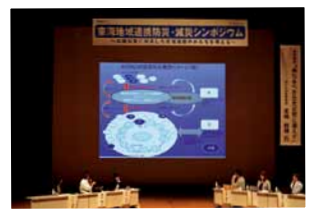
2010年 京都大学大学院工学研究科都市社会学専攻特定准教授

2014年 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻特定准教授

2015年 岐阜大学流域圏科学研究センター／地域減災研究センター准教授

【研究分野】

地域防災学、地震工学、自然災害科学



防災・減災シンポジウムでの様子



欧州の災害調査団 (EEFIT) メンバーと

好きな言葉

「会話の8割は誤解」。お互い違う人生を歩んできているので、言葉の受け止め方ももの見え方も違う。そう考えると人との関係がずいぶんと楽になりました。

研究者になってよかったこと

自分の知りたいことややりたいことの追求を、職業としてできるということが、やはり最大の魅力だと思います。

人の問題を科学的に解明し、 防災・減災につなげる。

Maki
Koyama

阪神大震災が研究のきっかけに

大学在学中に阪神・淡路大震災が発生。甚大な被害と増え続ける死者数を目の当たりにして「何かできることはないか」と考え、土木系の防災研究室に所属しました。

震災から人の命を守るには、建物などのハード面の強化は重要です。研究室でも建物等の被害について考察していました。ところが、建物を強くしても、人の被害は繰り返す。やはり、防災や減災に対する人の意識や仕組みなどのソフト面を強化することも大切なのです。

しかし、ソフトの問題は人や状況によって変わるため、仕組みや対策を立てても「これが絶対に正しい」といえないことが多いのも事実です。時にはそれが裏目に出ることもあります。その仕組みや対策を行う理由から科学的に明らかにできれば、効果も期待できるのではと考

えたのが現在の研究の始まりです。

防災の裾野を広げるリーダー養成へ

現在は岐阜大学の全学生を対象に、自助・共助に関するアンケート調査を行っています。学生がどんな家に住み、助けたり、助けられたりする人間関係のリソースをどれくらい持っているのかについて現状を把握することで、大学側の今後の災害対策に生かすことが目的です。

また、「清流の国ぎふ防災・減災センター」で地域住民や大学生を対象とした各種研修のカリキュラム開発と評価に対する研究も行っています。非常時は消防や救急が間に合わないことが多々あり、実際の救助に携わるのは地域住民が主体です。こうした事態に備えて知識とスキルの向上を図り、また、実践を通じた地域防災リーダー育成の

ためのプログラムを開発しています。地域防災は個人レベルではなく、地域全体で取り組むことが重要です。リーダーを養成し、防災・減災に関する人的ネットワークを構築して裾野を広げていける、そんな人材の育成を目指しています。他にも、東日本大震災による長期避難者の生活実態など、防災に関するさまざまな研究を他大学の先生と共同で行っています。

研究者を目指す 後輩へのメッセージ

自分の人生は自分のもの。常に自分はどうありたいか考えて生きてください。最悪の状況になった時にどうするかをあらかじめ考えておけば、「こんなはずじゃなかった」という事態を防ぐことができます。先の見えない時代、常に次の一手を持つことが最大の武器になります。

休日の過ごし方

愛息の「たんぼぼ」(ドーベルマン/み)と遊びに出掛けます。夏から秋にかけては夫と登山を楽しんでいます。

研究者になってよかったこと

研究と小動物診療、さらに教育にも携われる今のポジションにつけたことが良かったです。日々、やりがいを感じています。



動物病院では小動物の診療を行う



手術時の麻酔を担当



柴田 早苗

しばた さなえ

岐阜大学応用生物科学部附属動物病院
准教授

【略歴】

2003年 岐阜大学農学部獣医学科卒業
2010年 岐阜大学連合獣医学研究科卒業
2010年 東京農工大学農学部特別研究員
2010年 岐阜大学応用生物科学部助教
2014年 岐阜大学応用生物科学部准教授

【研究分野】

獣医麻酔学

Sanae
Shibata

教育・研究・小動物診療・運営、 4足のわらじを履く今、思うこと。

動物を救う周術期低体温の研究

私は主に小動物の麻酔、特に「周術期低体温」に関する研究をしています。周術期低体温とは、手術前から手術後までの期間に認められる低体温のこと。例えば、犬や猫は体重あたりの体表面積が大きいので、低体温に陥りやすいのですが、低体温はさまざまな悪影響をもたらすことが知られており、周術期における予防が重要です。その予防法として、アミノ酸に着目しています。アミノ酸輸液を手術前から実施すると代謝が亢進し、熱産生が生じます。その結果、周術期の体温低下が抑制されるのです。現在は、犬や猫におけるアミノ酸輸液による低体温の予防メカニズムや、最適輸液法について研究しています。そのほかにも、犬における周術期の脳波に関する研究にも着手しています。

幼い頃からの夢を叶えた今

生まれた時から家で猫を飼っており、動物が身近にいる環境でした。小学生の時に読んだ本がきっかけで盲導犬の訓練士に憧れ、それを母に告げると「動物に関わる仕事なら獣医さんもあるよ」と教えてくれました。獣医師という仕事を知っていくうちに魅了され、その夢を追ってここまでできました。大学卒業と同時に、大学院へ進んで研究をしようと考えた時期もありましたが、獣医師として臨床を経験してから研究の道に進みたいと思い直し、愛知県の動物病院へ就職。2年半ほど獣医師として働く中で、現場を見ながら実情を知ることができました。この2年半がその後の研究にも役立ちましたし、とても貴重な経験になったと思います。

現在は大学教員として、教育・研究・小動物診療・運営の4足のわらじを履いています。慌ただしい毎日ですが、小動物診療と研究に同時に携われるため、とてもやりがいを感じています。

研究者を目指す 後輩へのメッセージ

周囲の理系の女性研究者を見る限り、研究職は生活が不規則で仕事量も多いため、ワークライフバランスが取りにくい印象があります。私も先日入籍して新しい生活が始まったばかりなので、仕事と家庭の両立に難しさ戸惑いを感じています。いかにバランスを取るか、周囲の協力や理解を得ながら、落としどころを見極めて研究者生活を送りたいと思っています。

不安な点は挙げるとキリがありませんが、子どもが生まれても仕事を辞めるつもりはありませんし、この道を選んで良かったと心から思っています。私もこれからそのバランスを模索していくところですが、後輩となる皆さんの参考になるような生き方をしていきたいと思っています。

高橋 由起子

たかはし ゆきこ

岐阜大学医学部看護学科成人・老年看護学講座 准教授

[略歴]

1985年 岐阜県立衛生専門学校卒業

1985～89年 岐阜県立岐阜病院看護師

1989～92年 岐阜県立衛生専門学校専任教員

1999年～ 岐阜大学医療技術短期大学部助手

2000年～ 岐阜大学医学部看護学科助手

2000年 佛教大学社会学部社会福祉学科卒業

2004年 岐阜大学大学院教育研究科学校教育

学専攻(修士課程)修了

2007年～ 岐阜大学医学部看護学科助教

2008年～ 岐阜大学医学部看護学科准教授

[研究分野]

クリティカルケア看護、看護教育



看護学実習のカンファレンス



Gifuクリティカルケア看護情報研究会 司会の様子

好きな言葉

「働く」とは、「はた」である周りの人を「らく」にすること。いつも自分が頑張って働くことで、周囲が少しでも楽になればいいと考えて働いています。

休日の過ごし方

平日はフル回転で働くため、土曜日は掃除、日曜日は1週間分の買い出しをします。家族が多いので買い出しも大変です。

いつも100%でなくとも、 “いつか恩返し”の心が大切。

Yukiko Takahashi

子育て中の仕事は6割で合格点

人に教えることが好きで、看護学校卒業後に仕事・子育てをしつつ、通信教育で大学を卒業。多くの人との出会いに恵まれ、今の仕事に就くことができました。

結婚後、仕事に復帰したのは子どもがまだ幼児の頃です。子育てをしながら仕事も一生懸命頑張る中で、いろいろな人に指南を受け、「今は仕事がすべて100%じゃなくてもいいんだ」ということに気がきました。子育て中の仕事は60%でもいい。子どもが成長すれば必ず恩返しできる時がきます。その時は2倍働いて頑張ればいいのです。こうしたワークライフバランスは女性にとってはとても大切なこと。子どもが自立した今、私はその時の恩返しをしようと思って仕事を頑張っています。しかし、家庭がある以上、いつ何時、仕事や

研究ができなくなる時がくるかもしれません。そのために、家族の助けはもちろんのこと、仕事においても協力してくれる人を見つけておくことが大切です。

クリティカルケアの普及に注力

現在は2つのテーマで研究を行っています。1つは、岐阜大学の学習支援システム「AIMS-Gifu」の活用と、通常の授業をミックスしたブレンデッドラーニングによる教育効果についての研究です。eラーニングによる学習は、学習モチベーションをどう継続させていくかが課題で、eラーニングと対面授業を組み合わせることで、学習の継続性、学習のモチベーションはどう変化するかを明らかにし、これらを活用することで個々の学習成果をもっと上げることができないかという取り組みです。

もう1つは、クリティカルケア看護の

普及・向上、情報交換を目的とした「Gifuクリティカル看護情報研究会」の活動です。岐阜ではまだ、クリティカルケアの情報発信がうまくできていないようです。病院が抱える問題などを吸い上げ、お互いに情報交換をしながら、実際にクリティカルケアに携わる看護師の質の向上を図っていきたくと考えています。

研究者を目指す 後輩へのメッセージ

結婚や出産などのライフイベントは女性として経験した方がよいと思います。すべてに0か100かではなく、60%でも合格、という視点を持つこと。また、周囲の人々に迷惑をかけないように、仕事や研究の準備は常に早め早めにしておくことが大切だと実感しています。

好きな一冊

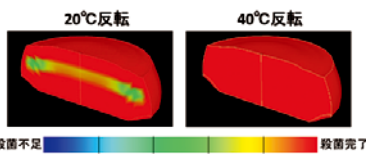
辻仁成の『代筆屋』です。メールが主流の今、この本を読むと手紙や手書きの良さを再認識します。

休日の過ごし方

観劇が趣味で、名古屋のみならず大阪や東京へ遠征し、リフレッシュしています。また、遠距離婚なのでよく東京と岐阜を往復しています。



岐阜市3Rクッキング講座での講義



ハンバーグを20分加熱調理した際の殺菌値分布



柴田 奈緒美

しばた なおみ

岐阜大学教育学部家政教育講座 助教

[略歴]

2009年 東京海洋大学海洋科学部卒業

2011年 東京海洋大学大学院海洋科学技術研究科博士前期課程修了

2014年 東京海洋大学大学院海洋科学技術研究科博士後期課程修了

2014年 岐阜大学教育学部家政教育講座助教

[研究分野]

調理学、食品科学、調理工学

Naomi
Shibata

アレルギーの子どもも 食べられる給食開発が目標。

食品工学と出会い研究の道へ

中学生の頃から数学が好きでしたが、「大学では白衣を着て実験や研究をしたい」と思っていました。ちょうど進路選択の時期に食物アレルギーを取り上げたテレビ番組を見て、「将来、子ども達みんなが食べられる学校給食に改善できれば」と食品系の学部へ進学を決めました。

現在の研究のきっかけとなったのは、大学で数学と物理・化学を融合した「食品工学」と出会ったことでした。食品工学とは物理目線で食品を捉えること。例えば、直径30cmで25℃のスイカを1℃の水で冷やしたら何分後に中心温度が5℃になるか、というように計算に基づき食材の変化を科学的に解明していく学問です。以前から数学が好きだったこと、また、生活に密着した学びであることからとても興味を持ちました。そ

して、食品工学の中でも加熱操作に着目した研究室で6年間研究を続けました。

加熱調理の研究成果をツールに

現在は「加熱調理過程における食材の変化」に着目し、科学的な側面から「この操作は何につながるのか？」について追究しています。例えば、干しいたけは湯で戻す人がほとんどですが、なぜ湯で戻すのが良いのか考える人はほとんどいないでしょう。実は、水でも良いのですが、温かいと干しいたけの溶出速度が速くなるため、効率よく、早く戻せるのです。こうした研究は、効率の良い調理法の開発や新しい食品開発へのアプローチへとつながります。

食材をどのように調理すれば食べる人にとっておいしく感じられるか、具体的に何℃で何分加熱すればよいかなど、様々な調理操作をツール化すれば、企

業の高齢者や子ども向け加工食品の開発にも役立つと思います。また、情報が整理されたツールがあれば、開発にかかるエネルギーコストの低減が期待できます。

こうした追究を高めつつ、アレルギー代替食の研究も少しずつ進められたらと考えています。当初の目標である「アレルギーの子もみんなが食べられる給食」の実現を目指して頑張りたいと思います。

研究者を目指す 後輩へのメッセージ

常にアンテナを張ることが大切です。自分が興味あることは何か、何を追究したいのかを常に考えていれば、おのずと情報や助けてくれる人が現れます。将来ばかりを考えるのではなく、まずは今取り組んでいることに真摯に対応することで、道は自然に拓けてくると思います。

寺町 ひとみ

てらまち ひとみ

岐阜薬科大学実践薬学大講座病院薬学研究室
教授

【略歴】

1980年 金沢大学薬学部薬学科卒業

2003年 金沢大学大学院自然科学研究科博士
後期課程生命科学専攻(社会人入学枠)修了

【研究分野】

医療薬学



2015年3月の卒業式 病院薬学研究室教員&学生と



2015年6月
バンコクにて
ACCP学会で発表

好きな一冊

アーサー・ヘイリーの『ストロング・メディ
スン』。主人公の女性は薬剤師。このよ
うな夫婦になりたいと結婚前に、夫に贈りま
した。少しは近づいたかなと思います。

休日の過ごし方

旅行が好きで、国内外のいろいろな所へ出
かけます。各地の自然や文化などに触れ
ると、心が豊かになります。本が読める、
鉄道の旅も好きです。リフレッシュする
ための休暇ですが、研究のアイデアなどを
ふっと思いつくことも多くあります。

自分の気持ちに素直に、忠実に。
悔いのない人生を送ってほしい。

Hitomi
Teramachi

臨床と研究、教育をつなぐ

病院および保険薬局での実務経験を有する教員で構成している「病院薬学研究室」では、医療現場に真に貢献できる問題解決能力のある臨床薬剤師の育成、そして、臨床現場での薬剤師実務を基盤とした教育研究を実施しています。臨床研究としては、医薬品の適正使用のために、臨床現場と連携を取りながら新たなエビデンスの確立を目指しています。具体的には、薬剤疫学や医療経済学等の手法を用いて、薬効・副作用および薬剤師業務の評価に関する研究です。現在、岐阜県および愛知県内の病院、セコム関連病院、保険薬局、横浜薬科大学と共同研究を行っています。

また、セルフメディケーション推進を目的として、児童・生徒とその保護者、地域住民を対象とした包括的くすり教育プログラムの構築(薬の正しい使い方プロジェクト)も展開しています。

病院薬剤師の経験を生かして

大学を卒業してから25年間、病院薬剤師として勤務しました。その間に金沢大学大学院博士後期課程(社会人枠)を修了し、2005年に薬学教育6年制の導入に伴って岐阜薬科大学に着任し、6年制カリキュラムの構築に関わりました。2013年10月からは教授として病院薬学研究室をまとめ、また、翌年4月から現在に至るまで附属薬局長も兼任しています。

医療は高度化・複雑化し、少子高齢化社会の到来と、薬剤師を取り巻く環境が大きく変化しています。このような状況で、医療の質の向上を保つために、薬剤師は最適な薬物療法を提供する医療の担い手として期待されています。岐阜薬科大学は臨床の現場と密に連携しており、特に、附属薬局は、勤務している薬剤師は全員が教員であり、臨床系教員として、臨床能力の維持・向上、教育、研究を両立

できる、とても理想的な環境です。

研究者を目指す 後輩へのメッセージ

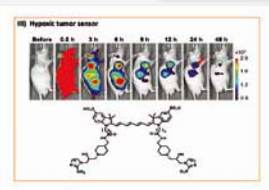
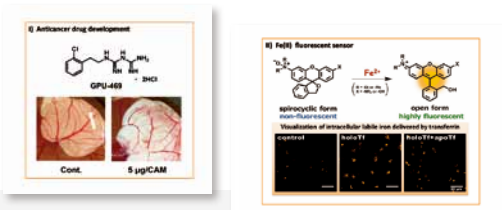
私は3人の子どもの生まれ、子育てをしながら仕事や研究に勤しんできました。子どものことを思い、「辞めた方がいいかもしれない」と思ったことも正直ありましたが、「仕事を続けたい、研究をしたい」という強い気持ちと、周囲の協力で支えられながら続けることができました。ただひとつ言えるのは、結婚、出産、子育て、いろいろな課題はありますが、悩む前に、「自分が本当にやりたいことは何か!」が一番大切ということです。今は働きたい人をサポートする体制も整っています。育児後に復帰して活躍している研究者もたくさんいます。自分の人生を振り返った時、よかったなと思いたいですね。自分の気持ちに素直に、忠実に、悔いのない人生を送ってほしいと思います。

好きな言葉

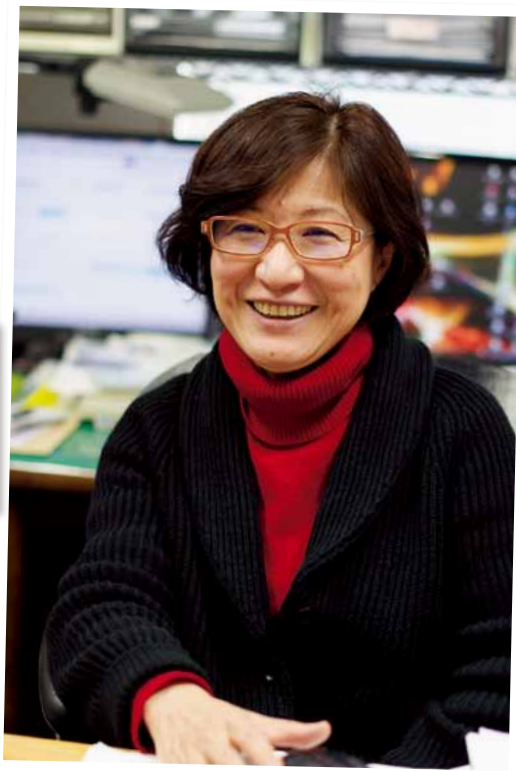
「六根清浄」。神道で執着を捨て心を清らかにすることをいう。科学者として、いつでも良いインスピレーションをキャッチできる心の状態でいようという思いもあります。

尊敬する人

小学生の頃に伝記を読んで、キュリー夫人の科学研究に没頭し、とことん追究した生き方に憧れました。



命と健康を守るものづくり
「創薬」を目指す研究を展開



永澤 秀子

ながさわ ひでこ

岐阜薬科大学創薬化学大講座薬化学研究室教授

【略歴】

1983年 岐阜薬科大学薬学部製薬薬学科卒業
1985年 京都大学大学院薬学研究科修士課程薬学専攻修了

1988年 京都大学大学院薬学研究科博士後期課程薬学専攻単位修得退学

1988年 慶應義塾大学助手(医学部薬化学研究所)

1997年 徳島大学工学部生物工学科講師

2001年 徳島大学工学部生物工学科助教授

2004年 米国Johns Hopkins大学医学部客員助教授

2006年 岐阜薬科大学薬科学部創薬化学大講座薬化学研究室教授

【研究分野】

創薬化学、有機化学、ケミカルバイオロジー

岐阜薬科大学薬化学研究室永澤研究室

<http://www.gifu-pu.ac.jp/lab/yakka/>

Hideko Nagasawa

未知の世界を切り拓く研究、 小さくても確かな足跡を残して。

子どもの頃の好奇心がきっかけに

小学生の頃から理科の実験が大好きで地域の科学教室に参加していました。薬学部に進み、化学の力で医療に貢献できることを学び、創薬研究に従事するに至りました。現在、高齢化社会に適した、人に優しいがん治療薬の開発を目指して、がんの微小環境を標的とする創薬研究を行っています。また、がん細胞だけが持っている種々のストレスに適応して生存する能力を阻害する新しいがん治療薬の開発や、がん組織特有の低酸素や酸化ストレスを検出するための蛍光イメージングプローブの開発を行っています。

幼い娘2人を連れて徳島へ

研究者の職を得た後に結婚と出産をし、育児をしながら、独立して研究できる職を目指して移動してきました。最初

に職を得た慶應大学の医学部には無認可保育園があり、週末にはよくバザーをして運営経費を稼ぎました。その後夫を東京に残し、2歳と5歳の娘と徳島大学に赴任し、9年間の苦しくも楽しい逆単身赴任生活をしました。職場の上司や同僚、保育園、小学校、放課後塾の先生、家政婦さんら様々な方々に助けられながら、必死に駆け抜けた合宿生活のような毎日でした。周囲の理解と協力があってこそ、子どもと共に成長できたのだと思います。母として、教員として、また研究者としてもさまざまなことを学んだ貴重な修業の時代でした。長女の中学入学を機に、娘たちは夫のもとへ引越し、その後、縁あって母校に職を得て岐阜に移り住み10年を迎えました。今も単身赴任生活です。

このように、目先の問題に立ち向かうことに精一杯で、とてもワークライフバランスの取れた人生とは言えませんでした。でも、研究者というのは、運が良ければ努力

によって、誰も知らない未知の世界を誰よりも先に覗くことができる幸運な仕事です。さらに精進して医療に役立つ、画期的な新薬の創成に挑戦したいと思っています。

研究者を目指す 後輩へのメッセージ

人生は、同時多発的に起こるさまざまな課題や問題にひとつずつ立ち向かっていく道のりです。家族ができれば問題はさらに指数的に増え、容赦なく押し寄せてくるでしょう。しかしその分、経験を積んで知恵やパワーも増強されていくと思います。科学研究は、一生をかけても解決できないテーマへの挑戦ですが、生涯をかけるに値するものだと確信しています。ジェンダーに捕らわれて自分を過小評価したり、活躍の場を制限したりせず、研究もプライベートも、のびのびと楽しく、充実させてほしいと願っています。

水野 幸子

みずの さちこ

岐阜女子大学家政学部健康栄養学科 学科長
教授

[略歴]

1996年 岐阜女子大学家政学部家政学科食物
栄養専攻卒業

2004年 岐阜女子大学大学院生活科学研究科
生活科学専攻修了

[研究分野]

臨床栄養学



やわらかい食事の簡単なレシピを綴った著書



ゼミ生たちと米粉のトルティーヤを作って学祭で出店

好きな言葉

大学時代の恩師からいただいた「素直に学ぶ」という言葉。正直なところ、当時は実感がありませんでしたが、今となって胸に響いてくる言葉です。

休日の過ごし方

平日にできなかった家事の穴埋めと、10年以上続けている庭のバラ作り。毎年、どんな花が咲くのか楽しみです。

Sachiko
Mizuno

美しい糸のように細々とでも 継続していくことの強さ。

移りゆく時代に寄り添いながら

昭和19年生まれ私の私にとって、若い頃はまさに「良妻賢母の時代」。女性が高校や4年制大学へ行くなんて考えられないし、子どもを置いて仕事に行くことは非常識だと考えられていました。「女は母として妻として家を守り支えるべき」という“当たり前の道”が敷かれていたのです。

幸いにも、私は高校を卒業し、栄養士の資格を取得するために短大へ進みましたが、24歳で結婚し、10年ほどは家事と子育てに専念しました。子どもが大きくなるにつれて、「やはり仕事したい」という思いが募り、恩師に相談したところ、彼女が経営する文化教室で助手をさせていただけることになったのです。その後、高校の講師や料理教室の講師の仕事が舞い込み、家事や子育てをしながら仕事をこなす日々を送りました。48歳で大学に編入し、53歳で管理栄養士の

資格を取得。その後は管理栄養士として病院で8年ほど働きました。

おいしい食事で健康を手に入れる

病院に勤めて改めて実感したのが、おいしく食べて栄養を取るのが一番だということ。例えば、慢性腎臓病患者さんは厳しい食事制限があり、食べたいものばかり食べてはいただけません。とはいえ、「治療食はまずいけれど仕方ない」ではなく、おいしく食事をしているうちに快方へ向かうことこそが幸せな人生だと思います。これが今日の研究につながっています。

現在は、食生活を極端に変える方法ではなく、日々食べているうちに自然に長生きができるような食材の研究や臨床栄養学の研究を進めています。また、慢性腎臓病患者さんに推奨される低タンパク米を自宅で作る方法や、安心して食べられるお菓子の開発も進めています。

研究者を目指す

後輩へのメッセージ

支援や制度が充実してきた今の時代でも、やはり女性は研究や仕事が思うように続けられなくなる境遇が必ずどこかでやってきます。そんな時は、周囲の理解や支援がないとうまくいきません。周りに助けてもらいながら、自分らしく努力を重ねてほしいと願っています。この「努力」という言葉がとても好きです。女という字が入っていて、なんだか力が湧き出てくる気がするからです。努力していれば、きっと周りが認めて、支えてくれるはず。くじけそうになっても、糸のように細々とでも、とにかく継続することが大切です。続けていくうちは細い糸が心許なく感じるかもしれませんが、やがてピンと張って、未来の自分を助けてくれる時が必ず来るはずですよ。

休日の過ごし方

可愛い孫たちと遊ぶことが楽しみのひとつです。また、年1回は必ず海外へ出かける機会を作っています。

研究者になってよかったこと

「出会い」が全て。さまざまな人と、必然的な出会いを繰り返してきたことで今の私があると思い、感謝しています。



明治期に書かれた中山道の旅行記などの資料



外国人向けの飛騨の観光本を執筆



山中 マーガレット

やまなか マーガレット

岐阜女子大学文化創造学部観光専修英語教育
コース 教授

【略歴】

1979年 オーストラリアクィーンズランド大
学文学部卒業 (BA取得)

1999年 岐阜女子大学大学院研究科卒業 (MA
取得)

【研究分野】

児童文学、旅行記、文学史

かけがえのない経験が、 人生の大切な糧になる。

Margaret
Yamanaka

日本での滞在と転機となった結婚

私はオーストラリアに生まれて、高校生生の時に交換留学生として初めて来日しました。一旦帰国して大学で学士を取得した後、再度日本へ。中部女子短期大学、岐阜大学、岐阜女子大学などで、専任の外国人教員として外国語や英米文学などを教えてきました。

日本で働き始めた当初は、数年間滞在中に母国に帰るつもりでしたが、主人と出会い、24歳で結婚して3人の子どもに恵まれ、永住することに。子どもたちが小・中学生になった頃には、短大で英語を教えながら、大学院へ進みました。短大で働いた後に大学院へ行き、帰宅して家事をこなし、家族が寝静まった午前2時から5時の間に博士論文を執筆するという、とてもハードな生活を送っていました。

日本の児童文学を世界へ発信

現在は岐阜女子大学で英語や児童文学などを教えながら、日本の旅行記や昔話、寺社などに残る神話や伝説などの研究をしています。

もとは自分の子に読んであげていた絵本がきっかけで、日本の昔話や児童文学に興味を持ちました。日本の昔話はとてもユニーク。ハッピーエンドで潔く終わる英米の昔話とは異なり、生活に密着したもの、表現方法が面白いもの、努力すると報われることや優しい心を持つことの大切さを伝えるものが多く、日本人の心の豊かさを感じるものばかりだと感じます。この日本の心を世界に伝えていきたいという思いと、反対に日本の学生に外国の児童文学に触れることで新たな気づきをしてほしいという思いがあり、現在の研究に至っています。国内外に残る日本の旅行記や児童文学を、言語的・文化的の双方の観点から分析し、新たな日本の一面を究めていきたいです。

研究者を目指す 後輩へのメッセージ

これまでの経験が、今の私を作ってくれていると感じています。分野によっては書物などから得る知識だけで良い場合もありますが、私にとってはやはり“Experience (経験)”はかけがえのないものです。これまでも、自分の足を使って地道に調べたことや、訪れた地での出会いや経験が私にさまざまなチャンスをもたらすと確信しています。経験は、人を育てます。見聞きするだけでは得られないものに気付かせてくれるのです。さらに、多方面から物事を見つめる力、分析する力も育てられます。ぜひ、これまでに研究し尽くされていない、自分の得意分野を見つけて、新たな発見と貴重な経験を大いに重ねてほしいと思います。

丹羽 桜子

にわ さくらこ

岐阜女子大学家政学部健康栄養学科 助教

【略歴】

2010年 岐阜女子大学家政学部健康栄養学科
卒業

2010年 岐阜女子大学家政学部健康栄養学科
助教、国試対策室勤務

【研究分野】

管理栄養士国家試験対策における教育・指導



質問に訪れる学生にフレキシブルに対応



復習・演習テストなどの問題製作を担当

好きな言葉

「おいしいものを食べられたら幸せ」。日本で一番おいしいと思える病院食を作られていた、私が尊敬する管理栄養士の先生の言葉で、とても印象に残っています。

休日の過ごし方

たまった家事を片付けながら、子どもと一緒に遊ぶ時間も確保しています。気が済むまで料理を作り続けることもあります。

我が子の存在が原動力！ 周囲の理解と支援に感謝。

Sakurako
Niwa

国家試験に挑む学生をサポート

私は社会人入学で岐阜女子大学に進学しました。以前の勤務先で尊敬する管理栄養士の先生に出会ったことがきっかけで、本格的に管理栄養士の勉強がしたいと思い、子育てがひと段落したタイミングで入学。卒業の翌年度から、「国試対策室」で働かせていただいています。

国試対策室では教育・事務スタッフとして、管理栄養士の国家試験対策用の問題作成や質疑応答、学生の悩み相談など、学生のサポートを担当しています。復習・演習テストの問題を作るほか、学生に向けてメールマガジンの配信も行っています。毎日3~6題程の問題・解答・解説を送ることで、忙しい学生たちが就職活動の合間に手軽に勉強ができたらいと思い、企画したのです。当初は「メルマガは勉強にならないのでは」との反対の声も多少ありましたが、勉強や就職活動

にスマホやWebを活用する学生にとってはプラスになると思ってスタートし、今も毎日コツコツと配信しています。

家庭との両立は周囲の支えのおかげ

現在は主人と私、中2と小2の息子の4人家族です。上の子は課題を抱えていて下の子はまだ小さく、家も遠く、近くに頼れる親類もいないため、三重苦ともいえる状況ですが、職場の方々には多大な理解と協力をいただいています。たとえば、早めに来て早めに帰らせてもらう日を作ったり、子どもの通院に合わせて時間割を考慮していただいたり…。学校から急な呼び出しがあっても快く送り出してくれる方ばかりで、本当に感謝しています。家では、主人がとても理解があり、子どもの面倒や家事にも積極的に関わってくれるのですごく助かっています。

慌ただしい毎日ですが、私の原動力

はやはり子どもの存在です。息子たちが家で待っていてくれると思うからこそ、何もかも頑張れるんだと思います。

研究者を目指す 後輩へのメッセージ

家庭と仕事の両立は容易いことではありませんが、自分の時間を少しでも作ってほしいです。働くお母さんは忙しく、たまに座って食事ができると、それだけでホッとできるもの。自分のための時間、落ち着ける時間をどこかで確保し、自らのバランスを取ってほしいです。一人でお風呂に浸かる、朝食を座って食べる、本を読むなど…。些細なことでもいいので、自分のことも大切にしてください。

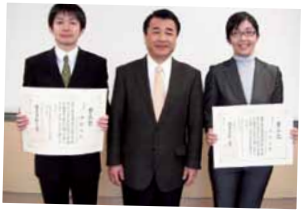
そのためにも、いつも手を取り合って協力できる素敵なお母さんを見つけて、自分らしく仕事も家庭も両立してもらいたいと願っています。

好きな言葉

「継続は力なり」。とにかく少しずつでも良いから続けていくこと。その努力の先に大きな力があると思います。

休日の過ごし方

3歳の息子が外で遊ぶのが大好きなので、公園で一緒に遊んだり、ショッピングをしたりと家族との時間を過ごしています。



働きながら博士号取得。担当教授と



研究所勤務時代の集合写真



丸山 広恵

まるやま ひろえ

アビ株式会社 事業戦略室 課長

【略歴】

2000年 岐阜大学農学研究科生物資源利用学専攻修了

2000年 アビ株式会社入社、総合研究所勤務
2003年 総合研究所が長良川リサーチセンターに移転・名称変更

2011年 岐阜薬科大学博士後期課程修了、学位取得（薬学博士）

2014年 事業戦略室に異動

【研究分野】

蜂由来の原料の研究開発、機能性成分の探索

Hiroe Maruyama

自分らしく、コツコツと。 継続の先に差す光を求めて。

特定保健用食品の開発に尽力

大学時代から植物や食品の有効成分について研究していました。それを生かして、「機能性のある食品づくり」に携わりたいと考え、蜂由来の原料や開発を行う健康食品の受託加工メーカーであるアビ株式会社に入社しました。

2014年まで長良川リサーチセンター（研究所）で、食品中の機能性成分の探索、機能性の研究などを行っていました。ミツバチの産物であるローヤルゼリー、花粉荷、プロポリスといった素材の研究に注力し、ローヤルゼリーでは初となる特定保健用食品の開発にも携わるなど、貴重な経験をさせていただきました。研究はもちろんですが、お客様の要望に沿った研究・調査を行うことも多くありました。

現在はリサーチセンターを離れ、新規事業の立ち上げや新規原料の企画・開発に

携わる「事業戦略室」に在籍しています。食品の機能をパッケージに表示できる「機能性表示食品制度」が2015年4月にスタートしたことで、今、健康食品のエビデンスが非常に注目されています。弊社はOEM生産が多いため、新制度施行に伴って販売者様の要望に合わせた製品づくりを進めています。さらに、新たな健康食品原料を開発するための情報収集を行い、新素材を探索し、共同研究などにつながら付加価値のある原料開発を目指しています。

会社の支援や周囲の協力を感謝

私は学位取得と同年に結婚し、翌年に長男を出産しました。弊社は社員用の託児所が2カ所あり、小学校入学前まで時短勤務が可能と、ワークライフバランスを取りながら仕事に打ち込める環境が整っています。また、主人や実家の両親の協力を得て、出張へもできる

限り積極的に行くことができています。周囲の協力のおかげで好きな仕事に打ち込めることにとても感謝しています。

研究者を目指す 後輩へのメッセージ

「子どもがいるから」、「自分は女性だから」と、無意識に一歩引いてしまう人がいるかもしれませんが、それでは勿体無いと思うんです。仕事と家庭の両立は大変ですが、それでも仕事や研究に対する前向きな気持ちを変わず持ち続けることが大切だと思っています。モチベーションを高く持ち、「いかに効率良く仕事をこなすか」、「優先順位は正しいか」などを自分に問いながら仕事に打ち込むこと。そして、自分を過小評価せず、何事もあきらめずに、コツコツ地道に続けることで必ず成果が生まれると思うので、自分を信じて全力で突き進んでほしいと思います。

岐阜大学男女共同参画推進室

〒501-1193 岐阜市柳戸1-1

Tel : 058-293-3378 Fax : 058-293-3396

E-mail : sankaku@gifu-u.ac.jp

URL : <http://www1.gifu-u.ac.jp/~sankaku/>

清流の国 輝くギフジョ 支援プロジェクト WEBサイト

URL : <https://diversity.gifu-u.ac.jp/>